

音の出る地図から音の出る絵ハガキへ

～QRコードによる展開～

From “Sound Map” to “Sound Picture Postcard”

—Expanding by QR Code—

小林田鶴子(神戸女子大学)

兼古勝史(共栄大学)

Tazuko Kobayashi (Kobe Women's University)

Katsushi Kaneko (kyoei University)

(キーワード)

音、地図、絵ハガキ(写真・画像)、風景、アーカイブ

はじめに

本稿は、筆者らが、サウンドエデュケーションのツールとして考案し、実践を重ねてきた「音の出る地図」「音の絵ハガキ」づくりの活動について、それぞれのメディアの特性に視点を据え、ひとつの発展的補完的關係を持った流れとして振り返り、地域の環境や記憶を記述・共有・表現するための手法としての可能性を考えるものである。

1. 「音の出る地図」の試み

「音の出る地図」とは「音地図」の一形態であって、パソコンなどの地図上に音のデータをリンクさせたもので、地図上に貼り付けられた画像や文字等をクリックするとリンクした音が聞けるものである。

そもそも「音地図」という言葉は、1980年代に東京学芸大附属竹早小学校の当時の音楽教諭星野圭朗によって試みられた「校舎内の『音地図』を作ろう」という授業に初めて登場した。注1) この時は紙面に描かれた地図に、どんな音がするかを記述するものであったが、2000年に四日市市で実施されたイベントで、小林がパソコンの地図上に音をリンクさせたものを「音の出る地図」としたのが、その始まりである。それ以降、特に野外で

のワークショップなどで、児童・生徒が作成しているが、紙面での「音地図」との大きな違いは、実際に録音した音が聞けるという点である。

また、ビデオ等の映像と違い、視覚的情報を敢えて写真のような静止画にしたことによって、聴覚的情報を中心にしてその場の状況をイメージできるという点に特徴がある。

音は物理的に必ず発音源がある。言い換えると音は発音される「場所」がある。そういった意味から、「場所」を指標にして、「音」を表記したものと考えることもできる。こうした「音の出る地図」を作成することにより、個人個人で捉え方が違う「音」を「地図」という一つの共通した切り口で示すことができる。

2. 「音の絵ハガキ」から「音の出る絵ハガキ」

へ

「音の絵ハガキ」とは、筆者らが地域に根差したサウンドエデュケーションの一環として考案し利用した一連の「音の風景をテーマにした写真とタイトルによる手づくりの絵ハガキ」を指す。

日本サウンドスケープ協会ワーキンググループ「まち・音・ひと・ねっと」の活動として、2015年8月に茨城県神栖町波崎で「あなたに伝えたい

私の好きな音風景」と題して、音から捉えた地域の魅力を手づくりの「絵ハガキ」で表わす第1回目のワークショップを行った（小菅、兼古、2017）（写真1）。音を「写真」と「タイトル（文字）」という非聴覚メディアに変換する体験を通してより「表現」領域に踏み込むとともに、「ハガキ」という私信性の強いメディアを用いることで、一層個人史的な音の感性や音の記憶を引き出すことを狙った。同年11月、滋賀県木之本で第2回目、翌年11月には山梨県市川大門町で3回目の取り組みを行い、第4回目となる埼玉県宮代町山崎山の取り組みでは、共栄大学教育学部田中卓也准教授ゼミの協力に加え、同大学内ベンチャー企業「有限会社かいしゃごっこ」の技術協力も得て、写真と同時に現場の音を録音し、その場でネットにあげ、絵ハガキに埋め込んだ QR コードから誰もがアクセスして聴くことの出来る「音の出る絵ハガキ」の作成を試みた。（写真2）

3. 地図、絵ハガキ、音の出ること、の意味

「音の出る地図」から「音の出る絵ハガキ」に至る一連の取り組みから、環境の音や音の風景についてのいくつかの知見を得ることができた。

「地図」とは主として地理情報等を集約し不特定多数と共有するためのパブリックなメディアであり、ハガキはどちらかと言えばプライベートなコミュニケーションツールである。音の地図を描くとき、私たちはそれを「共有」するものとして思い描き、記録し表現しようとする。一方で絵ハガキの作成は個人の体験の発露であり、私的な記憶や物語りの表現としての性格が強い。このことは私たちをとりまく音や音風景の在りようを反映していると考えられる。木岡（2007）は風景が個人的展開と集団的展開を往還しつつ定着していくものであることを指摘しているが、「地図」から「ハガキ」への展開は、聴覚的体験としての音・音風景もまた、こうした異なる位相を行き来することを実感させるものであった。

さらに「地図」や「絵ハガキ」を「音の出る」ものとして捉えなおすことは、静止した環境の中に時間を吹き込む行為であり、これこそが、「音」の持つ「時間」を際立たせる特徴を持ったメディアであると言えるのではないか。またこれは、聴覚的な風景体験を抽象化された記号や文字という意味の世界、形式知の世界から、場と時に根差した一回性の体験、具体的個別的な身体知のフェイズへと立ち戻す行為でもある。両者は上下や優劣の関係ではなく、補完関係にあると思われる。



(写真1) 波崎 音の絵ハガキ (2015)



(写真2) 山崎山 いい音！「音の絵ハガキ」(2017)

参考文献

- ・星野圭朗『創って表現する音楽学習 音の環境教育の視点から』、音楽之友社、1993、p. 125
- ・小林田鶴子『まちの総合学習がはじまるよ 「音の出る地図」をつくってみよう』、ブンテック NPO グループ、2003、pp. 1-9
- ・小菅由加里、兼古勝史「2015年度まち・音・ひと・ねっとワーキンググループ活動報告 音の絵はがきづくりワークショップ」『サウンドスケープ』第17巻、日本サウンドスケープ協会、2016、pp. 74-77
- ・木岡伸夫『風景の論理～沈黙から語りへ～』世界思想社、2007、pp. 52-59